



伝統文化として伝わる 季節感と職人のワザを 堪能する日本男児

着付歴
5年目

天野健司さん(41歳)

会社員(事務)

【おケイコ頻度】月に2度

【スクール名】

東原きもの学院

【クラス構成】男性クラス(講師も男性)

【URL】○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○



Q 着付を始めた
キッカケは?

A 祖父の形見の着物を見て
着てみようかなあ、と

「学生の頃は外に目が向いていました。留学すると日本について聞かれるのに、僕は日本の伝統文化をよく知らない。それで以前よりも伝統文化に興味をもつようになりました。実家で、祖父の着物を虫干ししているのを見て、着てみようかなと思ったのが着付を習い始めたキッカケです」

Q 着付教室=女性のものというイメージはありましたか?

A 最初から男性クラスに入ったので、特には

「東原きもの学院は男性の着付に力を入れています。僕は男性クラスに入ったので、女性の世界というイメージはありませんでした。とはいえ、お茶会や歌舞伎、文楽を見に行っても、着物の男性は少数派。街なかで着物姿の男性に出会うと、コーディネートや着こなしなど全身チェックしちゃいます」

Q 和の世界、ハマったツボは?

A 着物や小物に職人さんの世界が凝縮されている点

「洋服より着物のほうが季節感がありますよね。足袋だけでも、素材や色から世界が広がります。蛇の目傘など小物をオーダーすると、内側からのみ桜が透けて見えるとか、職人さんたちのセンスの素晴らしさに驚きます。着物を着始めてから、そんな職人さんの世界を知り、ますます和にハマりました」